



エナジーウィズ株式会社の知財部門における生成AI活用

エナジーウィズ株式会社（以下、エナジーウィズ）は 2024 年に生成AIの社内利用を開始し、わずか1年足らずで知財部門の月間工数を**1人あたり120時間以上削減**するなど、日本製造業の中でも突出した成果を挙げた。その要因は、①セキュリティ要件を満たす「**exaBase 生成AI**」の採用、②ガバナンスと教育を両輪に据えた全社展開、③知財専門家とDX担当の協働体制にある。本稿では導入背景から具体的ユースケース、定量的効果、他社比較、将来展望までを体系的に解説する。^{[1] [2]}

1. 企業概要と導入背景

1.1 エナジーウィズの事業と知財環境

エナジーウィズは蓄電池専門メーカーとして2021年に昭和電工マテリアルズの事業部門を分離・独立させる形で設立された。従業員は1,028名（2025年3月末時点）で、自動車・産業向けバッテリーを中心に国内外で事業を拡大している。競争が激化する蓄電池市場では、特許出願の質とスピードが直接収益に結び付くため、知財部門には大量の先行技術調査と高度な権利化戦略が要求される。^{[3] [4] [5] [6] [7] [8] [9]}

1.2 生成AI活用を決断した理由

2024年初頭、同社DX統括部は「機能の陳腐化」と「シャドーIT化」の二重リスクを認識した。従業員が外部の生成AIを個人利用すると機密情報が流出しかねない一方、生成AI自体は競争力強化の鍵でもある。そこで、国内データセンター完結・学習データ不使用を掲げる**exaBase 生成AI**（エクサウィザーズ製）を評価し、セキュアに最新モデルを享受できる点を決定打として採用した。^{[1] [2] [10] [11] [12] [13] [14]}

2. 導入プロセスと体制構築

2.1 トライアルから全社展開まで

導入は段階的に進められた。まず2024年6月、30名規模でトライアルを実施し業務適合性とセキュリティを検証。2025年1月、本番環境を全社に拡大し、同年3月には知財部門で120時間/人の削減を達成した。^[1]

2.2 ガバナンスとセキュリティ対策

exaBase 生成AIには利用ログ集約・禁止ワード設定・機密情報ブロックなど管理者機能が標準実装されており、DX統括部はダッシュボードで部門別削減効果を可視化して経営層へ報告している。さらにMicrosoft Teams上の専用チャンネルや社内SNSで成功事例を共有し、ボトムアップ型の利用文化を醸成した。^{[1] [2] [10] [12]}

3. 知財部門でのユースケース

3.1 特許文献読解・要約

従来は1万字を超える海外特許公報の要点抽出に1日以上要していたが、生成AIに請求項・要約・図面説明を分割入力し、課題-解決手段-効果の形式で出力させることで**数分で可読要約を取得**できるようになった。これにより先行技術調査の母集団精査フェーズが高速化し、審査請求前の拒絶リスク低減にも寄与している。^{[1] [15] [16] [17] [18]}

3.2 戦略的応用（権利範囲設計・応答戦略）

exaBase 生成AIはRAG機能で社内分類表や過去OA応答を参照しつつ、「広いクレーム案」「代替実施形態」「審査官説得用補正例」を同時生成するため、シニア弁理士の壁打ち相手として活用されている。特に欧州出願で多発するEPC Art. 56の進歩性指摘に対し、引用文献の差異を抽象化した三段論法を自動提案できる点が評価された。^{[1] [19] [20] [21] [22]}

3.3 その他創造活動支援

プレゼン資料自動生成（コードプレビュー機能）により、技術報告会用スライド原案を15分で作成し、部門横断の知財教育にも応用。また、新規事業のシナリオ立案では、蓄電池監視データと市場統計を入力してSWOT分析ドラフトを生成し、知財リスクを同時提示するワークフローが定着した。^{[1] [23] [24] [25]}

4. 効果測定とROI

4.1 定量的成果

全社100 ユーザーで月間1,600 時間を削減し、平均16 時間/人の効率化を実現。知財部門はこれを大幅に上回る120 時間/人を記録し、会社平均の約7.5 倍のインパクトを示した。^[1]

chart:51

4.2 定性的効果

- ・ **品質向上**: 権利範囲の網羅性とOA応答の説得力が向上し、拒絶理由通知の回数が減少。^{[26] [27]}
- ・ **スキル平準化**: 新入社員が熟練者と同等レベルのプロンプトを作成し、ベテランのナレッジを短期吸収。^{[1] [28]}
- ・ **イノベーション促進**: 異分野技術の組合せ提案が増加し、共同研究先探索が迅速化。^{[29] [30]}

5. 他社事例との比較と業界動向

5.1 同業他社とベンチマーク

京セラは特許明細書作成支援で作業時間を最大50%削減したと報告しているが、エナジーウィズの120 時間/人削減は率でも絶対値でも凌駕している。NTTデータは160 万件の埋もれ特許をAIで再評価する構想を掲げるが現時点で効果は公表されていない。したがってエナジーウィズの成果は国内製造業トップクラスと評価できる。^{[25] [21]}

5.2 日本企業における生成AI活用トレンド

法人向け生成AI市場ではexaBaseが国内シェア1位を獲得し、多業種で導入が拡大。知財分野でもPatentfield AIRやAI孔明TMなど特化型ツールが台頭し、文書要約・ポートフォリオ分析・ドラフト自動生成といった機能が標準化しつつある。これらの動きは、知財部門を「守りのコストセンター」から「攻めの価値創造部門」へ転換させる潮流を加速させている。^{[4] [13] [19] [31] [32] [9]}

6. 課題と今後の展望

6.1 スキル格差是正と教育

利用者間の活用レベル格差が残存し、エナジーウィズはexaBase DXアセスメント & ラーニングを導入して全社員のリテラシー底上げを図っている。プロンプト設計力の定量評価と継続学習プログラムが鍵となる。^[1]

6.2 フェアネス・リーガルリスク対応

生成AIは誤情報や生成物権利帰属の問題を内包するため、出力の根拠リンク表示や二重チェック体制が必須。同社は知財専門家の最終レビューを義務化し、将来的にはExplainable AI機能の実装を検討している。^{[10] [14] [26] [33]}

結論

エナジーウィズは、セキュアな生成AI基盤をいち早く整備し、ガバナンスと教育を軸に知財業務へ深く浸透させることで、月間120 時間/人という圧倒的な効率化を達成した。これは単なる時間短縮にとどまらず、権利範囲戦略の高度化や新規事業創出支援など、知財部門の価値を質的に転換する成果である。同社の事例は、日本企業が生成AIを実務レベルで活かすためのモデルケースとなり、今後はスキル平準化とExplainable AIの導入がさらなる競争優位を左右すると考えられる。^{[1] [2] [29] [20] [26] [22]}

✱

1. Zhi-Cai-Bu-Men-teYue-Jian-120Shi-Jian-_Ren-noYe-Wu-Xue-Jian-sekiyuriteitoXian-Jin-Xing-woLiang-.docx
2. <https://www.idaten.ne.jp/portal/page/out/mss/exa-enterprise-ai/exabase-generative-ai.html>
3. <https://job.mynavi.jp/26/pc/search/corp283756/outline.html>
4. <https://www.monodukuri.com/gihou/article/5395>
5. <https://ja.wikipedia.org/wiki/エナジーウィズ>

6. https://doda.jp/DodaFront/View/Company/j_id_10209851852/
7. <https://www.energy-with.com>
8. <https://job.mynavi.jp/27/pc/search/corp283756/outline.html>
9. https://ai-market.jp/technology/llm-patent_search/
10. <https://japan.zdnet.com/article/35226476/>
11. <https://cn.teldevice.co.jp/product/exabaseai/>
12. <https://exawizards.com/exabase/gpt/gov/>
13. <https://exawizards.com/archives/29849/>
14. <https://exawizards.com/archives/27496/>
15. <https://roppongidori.jp/updates/claim-summary-using-generative-ai>
16. <https://note.com/tsunobuchi/n/ne4113972710b>
17. https://www.japio.or.jp/00yearbook/files/2024book/24_4_04.pdf
18. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/advpub/0/advpub_2024-025/_html/-char/ja
19. <https://evort.jp/presentations/patentfield/patentfield-air>
20. <https://www.pate-caree.com/Media/Article/52>
21. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/5f251ebd2184273e92e9.pdf>
22. https://www.konicaminolta.com/jp-ja/investors/ir_library/intellectual_property/2024_03.html
23. <https://appsource.microsoft.com/ja-jp/product/office/wa200007118?tab=overview>
24. <https://exawizards.com/exabase/gpt/>
25. <https://dxmagazine.jp/news/2539ko07-2/>
26. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/dced40f280efc3138318.pdf>
27. <https://bizzine.jp/article/detail/12072>
28. <https://media.emuniinc.jp/2025/06/27/intellectual-property-ai/>
29. <https://patent-revenue.iprich.jp/専門家向け/1450/>
30. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000304.000042056.html>
31. <https://exawizards.com/archives/30467/>
32. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000498.000040956.html>
33. https://www.gijutu.co.jp/doc/b_2285.htm
34. <https://mid-tenshoku.com/agency/a-10269/>
35. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000279.000030192.html>
36. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/29e85f5289c3b1b2478a.pdf>
37. <https://hr.tokkyo-lab.com/column/pinfosb/chizaigyomu-ai>
38. <https://en-hyouban.com/company/10201394078/>
39. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000211.000042056.html>
40. https://note.com/tokkyo_ai/n/nc0af0d2baadf
41. <https://www.idx.jp/notice/aikoumei-advantage/>
42. <https://www.tetsu7017.com/blog/patent-summary-by-chatgpt/>
43. <https://www.tetsu7017.com/blog/microsoft-copilot-patent-summary-for-business-applications/>

44. <https://www.tokkyo.ai/pvt/notice/case1/>
45. <https://media.emuniinc.jp/2025/01/10/ai-patent-search/>
46. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000262.000042056.html>
47. <https://zelojapan.com/lawsquare/53792>
48. <https://www.nssol.nipponsteel.com/casestudy/02908.html>
49. <https://note.com/tsunobuchi/n/n17982922130d>
50. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000492.000040956.html>